

2017/2/23

## (日々雑感 27)



昨日、未明に記事を書きました。

朝には、株式会社 うと Q のパートナーさんとメールで打ち合わせをしました。

昼少し前には、警備会社の所長さんおよび担当者の方と意見を交換しました。所長さんは、時折、所長としてではなく「私人としての立場で」とことわっても意見を述べられることも有りました。

午後からは、今まで住んでいた地元の自治会長さんとあわや喧嘩別れをしそうになるほど激しい議論を闘わせました。

すべて、その前夜に実行したアクションに起因するアクシデントに備えて、直ぐ行動が起こせるように待機宿泊していたホテルのロビーでの話でした。

「そんなにあれこれ手を出して大丈夫なの？」

と言うご意見を、さるお方から戴きました。誠に有り難いお心遣いです。

しかし、自分はあまり大変だとは思っていないのです。外から見ると一見ばらばらには見えそうですが、ぼくの中では、何かがつながっているような気がしているのです。ポイントや探しているもの、目指しているものは一緒のような気が何となくしているので、分散ではなく、相互にコラボしながら積み上がっているような感覚でいるのです。

それは何かというと「日本をよくしたい」という思いです。

国家ではなく、「われわれ」というか「みんな」というか・・・。

以前にも書きましたが、

「なんや、このおっさん、誇大妄想狂か権力亡者とちゃうんか？危ないから近づかん方がええで」

にみなさんからは見えるかもしれないことは重々承知の上で書きましたし、又今も書いております。

何で、こんなことを言っているかということ、例えばこんな喩えです。

誰のために、あるいは何のためにかは一旦不問に付して、会社で一生懸命働き、主任が課長に、課長が部長に出世したとします。

当然本人やそのご家族はとても嬉しいだろうと思います。しかし、自分がいくら出世したとしても、会社がつぶれてしまっただけでは、課長のへったくれも部長のへったくれもありません。つぶれてしまったら、肩書きの前に「元」〇〇社の、がつくだけの虚しい存在になっ

てしまいます。つまり自分の出世の前には、働いている会社がよくなり、存続していることが大前提なのです。それを忘れた出世は、亡霊みたいなものなのだと思うのです。

あるいは本人の居住地域の自治会でも同じことが言えます。

自分の家がだんだん立派になり、大きくなっていったとします。

同じようにご家族は、快適な暮らしぶりに我が家を誇らしく思い、幸せな気分になられるでしょう。

しかし、もし、ご自宅の周りの家々が、次第に空き家化し、不法侵入者の温床化していったとしたらどうでしょう？

まず、物騒で昼間でも安心して外出が出来そうもなくなります。加えて知らぬ間に家の資産価値が大幅に下落してしまうでしょう。

これも、居住地域が安全で安定していることが大前提なのです。

つまり、会社も家も、まずはその土台となる自分や家族等の周りを取り巻く周辺環境、そうしてそのさきには「日本」、更に先には「世界」が安定していないと成り立たない話だと思うのです。

「自分だけよければ」「じぶんさえよければ」を成り立たせることはあまり良いことではありませんが、その「れば」や「さえ」を成り立たせることに於いてすら、大前提の順番を間違えてはいけない気がするのです。自分の幸せは、ある大前提を基にして成り立っているのだと言うことに目をやらないといけないのだと思うのです。

それと対局にある話を思い出しました。

昔、学生の頃にマックスウェーバーという社会学者だったか何かの本を読んだことがありました。うろ覚えですが、少しはしょって短絡的に言うと、そこには

「周りはどうであれ、自分は禁欲的に働き、貯蓄をし、拡大再生産に回すことが神さまに選ばれる道だ。後は神さまがよろしくやってくれるから、脇目も振らず、余計なことは考えずに、せつせと働きなさい。結果それが、神さまの御心になうことになる、と言う考えが元で資本主義が発展することになった」つまり、アダムスミスの本にある一種の「神の見えざる手」みたいな内容でした。(マックスウェーバーがそう考えているというのではなく、当時のドイツを中心にしたプロテスタント達がそう考えたと言うことを論じているので、そこは誤解の無きよう)

それに似た考え方が、実は僕らにもあって、自分が良くなることこそが、地域や会社や日本が良くなることなのだから、まずは自分だけ、でいいのではないか？あまり余計なことは考えずに、どこかの誰かに任せておけば、自然と良くなるから、国だの会社全体だの地域だのと大げさなことは考えなくても良いとおもう、と言う考え方。

しかしぼくは「自分の方からだけ」というこの一方向からのみの見方がどうも不安定で落ち着かないのです。何か欠けているような、不安定さや「見落とし」をしている感じがしてならないのです。

それに、「まずは」が「取りあえず」になり、「取りあえず」がいつしかうやむやになって

、そのまんま、つまり永久に「自分の方から」だけで良いことになってしまうような気がして。

ですから、やはり、カウンター・バランス的な感覚からすれば、「自分の方」からだけではなく「相手の方」からも必要な気がするのです。国や会社や地域から逆に自分を見つめるという見方の必要性とでも言いましょうか。

その考え方、感じ方からすると、自分の幸せを成り立たせようと思ったら、対極的に、どこかで一番迂遠で遠いところに思えるところから、時には逆照射して自分を見る必要があるような気がするのです。

無論「常に」なんかではなく、「時折」で十分だと思います。

しかし、この時折が意識野、思考野にあるのとないのとは全然違う気がするのです。

こういうことを述べた後、ある人から

「国家主義、全体主義のにおいがする」

と言われたことがありました。

ちょっと意外でした。

国家主義とか全体主義というのは、最終目的や最高最大価値が国や全体に有り、個々人はその駒か手段に過ぎないと言う考え方ですが、ぼくの言いたかったのは、片方だけでは、それこそ片手オチじゃないでしょうか？と言う話をしたつもりだったからです。もう一方の「相手の方から」をいれてバランスを取らないと本当の自分の立ち位置や姿はみえないのではないのでしょうか？見えなければ、立ち方や在り方を間違えて、結果、幸せにはならないのではないのでしょうか？と言っただけのつもりだったからです。

「相手から自分を」の后者のところだけ、強調的に捉えられて真意が伝わっていなかったとのだとしたら、ぼくの表現不足、技量不足に起因したことだとは思いますが。

とにかく、一方向からだけではダメなような気がします。やはり多方向、双方向から物を見ないと、間違える気がするのですが。